

尿路系悪性腫瘍患者の受診契機に関する検討

東京慈恵会医科大学付属病院本院泌尿器科（主任：大石幸彦教授）

池本 庸，大石 幸彦，小野寺昭一

岸本 幸一，清田 浩，古田 希

鈴木 康之，浅野 晃司，長谷川倫男

RETROSPECTIVE ANALYSIS OF CHIEF COMPLAINTS
OF PATIENTS WITH UROGENITAL MALIGNANCIES
OVER THE PAST DECADE AT THE
JIKEI UNIVERSITY HOSPITALIsao IKEMOTO, Yukihiro OISHI, Shoichi ONODERA,
Koichi KISHIMOTO, Hiroshi KIYOTA, Nozomu FURUTA,
Yasuyuki SUZUKI, Koji ASANO and Norio HASEGAWA*From the Department of Urology, Jikei University School of Medicine*

We analyzed the chief complaints of patients with four major urogenital malignancies (renal cancer, renal pelvis and ureter cancer, bladder cancer and prostatic cancer) over the past decade (1990–1999) at the Jikei University Hospital. Over the last 10 years, a high percentage of renal cancers were detected incidentally. By contrast, prostatic cancers were more likely (10.5%) than other cancers to be detected on the basis of symptoms of metastasis. However, since 1995 more prostatic cancers are being detected with prostatic-specific antigen screening at the health checkups. Gross hematuria is the chief complaint of most patients with uroepithelial cancers (cancers of the renal pelvis, ureter and bladder cancer). Additionally, renal pelvis and ureter cancers were diagnosed with screening in a few patients in the past five years.

(Acta Urol. Jpn. 49 : 65–68, 2003)

Key words : Urogenital malignancy, Chief complaint, Screening, Incidental cancer

緒 言

近年，癌検診をはじめとして各種スクリーニングや尿路系悪性腫瘍に対する一般臨床医の関心の高まりにより，泌尿器科外来においても癌患者の受診契機は大きく変化していることが考えられる．今回，当科尿路系悪性腫瘍患者の主訴と受診契機を解析し，都市部大学病院の癌患者の受診動向を検証する．

対象および方法

1990年1月から1999年12月までに東京慈恵会医科大学付属病院本院泌尿器科を初診し，病理学的に癌と診断された尿路系悪性腫瘍患者（腎細胞癌279例，腎盂尿管癌110例，膀胱癌462例，前立腺癌399例）を対象とした．これらの症例をその受診契機により（肉眼的）血尿群，転移（による症状から診断された）群，他疾患精査（により偶然発見された）群，健診（ドック）群，腹部症状（腹痛，腰部背痛，腹部腫瘍など）群，排尿症状群などに分けて年度別に集計した．なお，偶発癌と分類された例は腎癌取り扱い規約¹⁾による

広義の偶発腎癌の定義を他の3つの癌にも当てはめて分類されたものである．統計学的解析は χ^2 検定を用いた．

結 果

Fig. 1 に腎細胞癌，腎盂尿管癌，膀胱癌，前立腺癌の4つの癌患者の主訴を各年度別にパーセンテージ（%）で示した．腎細胞癌（Fig. 1a）では1990年代は年度により多少はあるものの健診（ドック）そして他疾患精査群が全体の半数を超え（10年間の総数279例中190例，68.1%），多い年ではこうした無症候例が約80%に達している．これに対し原発巣または転移巣に基づく症状を主訴とする例が半数を超える年度は1年もなかった．腎盂尿管癌（Fig. 1b）では肉眼的血尿がほとんどの年度を通じて最も高く，時には100%に達していた．ただし，1994年からは原発巣に基づく主訴ではなく，他疾患精査中または健診（ドック）による発見例がみられるようになっている．1999年はこうした無症候例が全体の約30%におよんでいる．膀胱癌（Fig. 1c）でも肉眼的血尿が全年度を通じて最も多く，

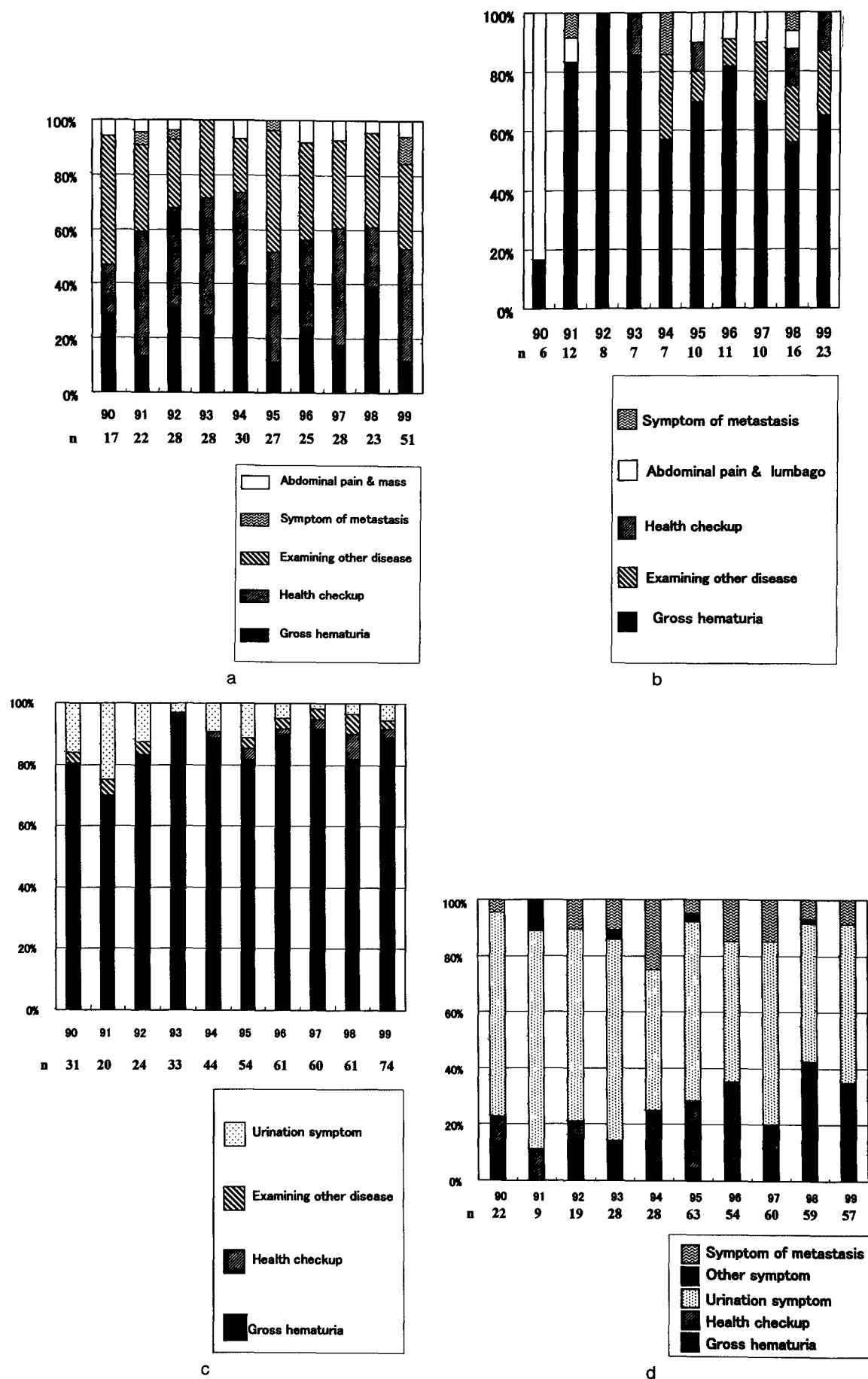


Fig. 1. Annual shift of chief complaint with 4 major urogenital malignancies (a: renal cell cancer, b: pelvis and ureter cancer, c: bladder cancer, d: prostatic cancer).

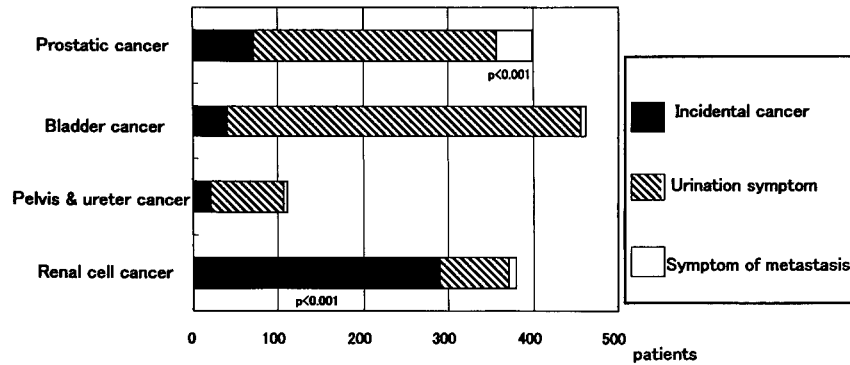


Fig. 2. The case detected incidentally and the case detected on the basis of metastasis for the last decade. Incidental cancers were more frequently detected in renal cell cancers ($p<0.001$), and also detection rate on the basis of metastasis was significantly high in prostatic cancers ($p<0.001$).

常に80%前後が肉眼的血尿を主訴としていた。無症候性の膀胱癌例は全年度を通じて0~10%程度であった。前立腺癌 (Fig. 1d) では排尿困難、頻尿など排尿症状が最も多く、その比率は50~70%程度であった。一方 PSA などを中心とした健診 (ドック) による発見例は1995年前後から増え始めていた。

Fig. 2 にこれら4つの癌の実数を10年間でまとめて表示し、そのうち偶発癌の割合、転移に基づく症状で発見された例の割合を示した。偶発癌は腎細胞癌で頻度および実数とも最も高く、他の3種の癌に比べてその差は統計学的に有意 ($p<0.001$) であった。膀胱癌と腎盂尿管癌はともに原発巣に基づく主訴が大半を占め (ともに全体の70~80%), その分布もきわめて似ていた。転移に基づく症状が主訴となった例は前立腺癌でその比率、実数ともに最も多く (10年間の総数で399例中42例, 10.5%), 他の3種の癌に比べてその差は有意 ($p<0.001$) であった。

考 察

例年、特に大学病院を中心に数多くの泌尿器科臨床統計が報告されているものの、そのほとんどは外来または入院患者の疾患別総数や治療内容の集計であり、各疾患の受診契機について発表しているものは少ない。一方各泌尿器科癌の臨床統計も数多く認められるものの、それらの癌を集計し、相互に比較検討することによって受診動向を考察している報告も本邦ではあまり認めなかった。そこで今回われわれは泌尿器科領域の代表的癌である腎細胞癌、腎盂尿管癌、膀胱癌、前立腺癌の4種の癌を取り上げ当院での集計をここに報告した。

その結果、腎細胞癌では偶発癌の頻度が半数を超えていた。偶発腎癌の予後については非偶発腎癌に比し有意に予後良好とされ²⁾、また偶発腎癌の中でも検診発見群は他疾患精査中発見された偶発腎癌群に比しても有意に予後良好とされ³⁾、その意義は高く評価され

ている。本間らは都市部の大学病院およびその都市部関連病院での腎癌の大規模集計を行い、腎癌に占める偶発癌の頻度を約2/3強と報告している⁴⁾。これはわれわれの報告と同様の結果であり、この傾向は多くの都市部の医療機関でも同様^{5,6)}であった。しかし丸山ら⁷⁾は偶発腎癌の頻度は35.2%, 阿部ら⁸⁾は同様に36%と報告しており、本邦では地域差があることは否めないと思われる。こうした地域差の原因としてはおそらく都市部では健診における腎を含めた腹部超音波検査がルーチン化しているためと推察される。

また偶発癌の定義が各取扱い規約では決められていないものの、腎癌取扱い規約における定義を応用すると、われわれの検討ではこれら4種の癌のうち偶発癌の割合は明らかに腎癌でのみ有意に高率であった。しかし最近では腎盂尿管癌、前立腺癌でも偶発癌例が増加している傾向もある。一方、健診 (特に健診腹部超音波検査) で発見される膀胱癌が近年報告されてはいる⁹⁾が、その比率はまだまだ低く、腎盂尿管癌や前立腺癌のような増加はみられなかった。

また前立腺癌においては転移巣からの診断で原発巣が明らかになる例が他の3つの癌に比し有意に高率であった。前立腺癌のこうした事実も推測されてはいたものの、今回の集計によってその特徴がより明らかとなった。特に PSA 検診の普及により早期で発見される前立腺癌が増加していることはわれわれの他の解析¹⁰⁾でも示されていたが、一方で転移巣から発見されるこうした進行前立腺癌が減少していないという事実は PSA 検診の普及に伴い当然減少してくるはずの進行癌症例がいまだ存在することを意味し、PSA 検診の有用性を検討する上で重要な事実と思われた。

結 語

大都市の中心街に位置し、特定機能病院である当院の過去10年間の尿路系悪性腫瘍患者をその受診契機から検証した。その結果、偶発癌の頻度は腎細胞癌で有

意に高かった。その比率は過去10年ほぼ一定(279例中190例, 68.1%)で, 多くは健診またはドックでの腹部超音波検査による発見例であった。また前立腺癌では転移に基づく症状で発見される頻度(10.5%)が有意に高かった。一方偶発前立腺癌例は1995年より増加し, 一般医の認識の広まりや PSA 検診の普及が影響したものと思われた。膀胱癌, 腎盂尿管癌では血尿を主訴とする例が大多数で, 尿路上皮腫瘍の診断における肉眼的血尿の重要性が再認識された。

本論文の要旨は2000年9月, 第65回日本泌尿器科学会東部連合総会(山形市)で発表した。

文 献

- 1) 腎癌取り扱い規約(第3版)日本泌尿器科学会・日本病理学会 日本放射線学会編, 金原出版, 東京, 1999
- 2) 剛司和男, 岡本雅之, 森末浩一, ほか: 偶発腎細胞癌の臨床病理学的検討。日泌尿会誌 **86**: 1643-1650, 1995
- 3) 新宅一郎, 鈴木康義, 内啓一郎, ほか: 検診超音

波検査により発見された腎癌の特徴。日泌尿会誌 **91**: 43-48, 2000

- 4) 本間之夫, 北村唯一, 保坂義雄, ほか: 偶発腎癌症例数と死亡数の関係—8施設の実測値とモデルによる検討—。日泌尿会誌 **90**: 228, 1999
- 5) 金丸洋史, 岡田謙一郎, 池田龍介, ほか: 北陸腎癌登録(北陸泌尿器科研究会)における早期集計結果(1997~1999)。日泌尿会誌 **92**: 334, 2001
- 6) 吉田直正, 池本慎一, 長沼俊秀, ほか: 腎細胞癌の臨床的検討。日泌尿会誌 **93**: 320, 2002
- 7) 丸山琢雄, 鈴木 透, 青木 大, ほか: 腎細胞癌の臨床的検討。日泌尿会誌 **92**: 248, 2001
- 8) 安部明彦, 飯沼昌宏, 松浦 忍, ほか: 腎細胞癌の臨床的検討。日泌尿会誌 **93**: 371, 2002
- 9) 鳥居 徹, 笠谷俊也, 今田世紀: 人間ドックの経腹式超音波検査で発見された膀胱腫瘍。日泌尿会誌 **83**: 1847-1851, 1992
- 10) 木村高弘, 池本 庸, 大石幸彦: 当院における前立腺癌臨床像の変遷—受診契機と初診時臨床病期の関連性—。泌尿紀要 **46**: 83-86, 2000

(Received on May 20, 2002)

(Accepted on September 7, 2002)